

社会を変えられるという手応えが 進路意識を豊かに醸成する

開星中学校・高校では、2013年度に校内で学力観の統一を図り、10年来の歴史を持つキャリア教育「開星ドリカム・プラン」に加え、SSHの指定を受けた中高一貫コースで「SMILEプログラム」を導入した。教科の学びを実践で生かすことで、社会を変えられる力を生徒に自覚させ、真の希望進路に迫ることを目指している。

生徒自身が成長を実感できる キャリア教育に深化させたい

開星中学校・高校では、1999年、「総合的な学習の時間」の全面実施を見据えて「開星ドリカム・プラン」(現「開星夢実現計画」と呼ばれるキャリア教育プログラムをスタートさせた。これは、将来を見据えて夢や目標を描き、それに基づいて志望大学・学部を定め、日々の学習や大学入試へのモチベーションを高めていくプログラムだ。名称は、キャリア教育の先進例であった福岡県立城南高校の「ドリカム・プラン」を参

考にした。

「開星ドリカム・プラン」はマイナーチェンジしながら継続してきたが、2011年度、SSHの申請を機に大幅な改訂に取り組んだ。浜屋陽教頭はその背景を次のように語る。

「『開星夢実現計画』では、1年次に職業を知るところから始めますが、3年次の最後の面接練習で志望動機を聞いてみると、その内容が浅い印象を受けることが少なくありませんでした。職業や大学などの進路に関する知識が増えたものの、高校生活を通して自分ができるという能力を身につけたのかといったところまで認識

できていないことに原因があったのだと思います。生徒が自分の成長を実感し、自分は社会でどのように活躍できるのかということを考え、それを語れる力を育てる必要があると思いました」

折しも「21世紀型能力」などの学力観を巡る議論が活発化していた時期とも重なり、浜屋教頭を座長とする「開星未来構想委員会」が立ち上げられ、育成すべき生徒像と学力観の統一が図られることとなった。同時に、「開星ドリカム・プラン」を再編して6年一貫の「SMILEプログラム」(中高一貫コースで実施)を

策定し、13年度から5年間の指定でSSHに採択された。以下、「開星夢実現計画」の中核的取り組みである「ドリカムの時間」と「SMILEプログラム」を中心に、進路意識を高める取り組みを見ていく。

身につけさせたい力を 「3つ」に集約

同校の学力観は「3つも」に集約されている。それは、「つくる力(創造力)」「つながる力(共生力)」「もちこたえる力(忍耐力)」の頭文字を取ったキャッチフレーズで、**和聡宏校長**が常々生徒や教師に語り

かけてきた言葉だ。

「『つつも』に集約する前は、学力の捉え方が教師間でまちまちでした。ある先生は知識に比重を置き、別の先生は活用力に注目する。最終的にそれぞれの生徒が志望する大学の入試を突破できる力を育成しなければいけないという点では一致して、そこで重視する力に違いがありました。教師が同じベクトルで前に進むために、全校で目指すべき学力



開星中学校・高校校長
大多和聡宏 おおたわ・あきひろ
教職歴29年。同校に赴任して30年目。「生徒は未来からの留学生。未来で輝いてくれるために尽力する」



開星中学校・高校教頭
浜屋陽 はまや・あきら
教職歴28年。同校に赴任して29年目。「より高みへ。失敗を恐れず、挑戦する姿勢を持つ」



開星中学校・高校
田中薫 たなか・かおる
教職歴17年。同校に赴任して18年目。研究開発主事。SS目部長。「常に生徒とともに、常に生徒のために常に公平に」



開星中学校・高校
石川浩介 いしかわ・こうすけ
教職歴14年。同校に赴任して11年目。学習進路部長。高校2学年主任。「自ら考え行動できる生徒を育てる」

観を統一すべきだと考えました」（浜屋教頭）

生徒に身につけさせたい力とは何か、「開星未来構想委員会」のメンバーが話し合って約20の案を出し、それを半分にまとめ、最後に論理的思考力や分析力は「つくる力」に、表現力や協働性は「つながる力」に、自律性や計画性は「もちこたえる力」に、といった具合に「つつも」に集約し、全教師が持つべき共通の学力観が固まった。

「研究授業の際、先生方は『つつも』のどの力を育てるのかを明確にした

島根県・私立開星中学校・高校

- ◎松江・シン裁縫女学院として創立。「品性の向上をはかり、社会の発展に役立つ有望な人材を育成する」を建学の精神とする。陸上・柔道・野球・体操・テニスなど全国レベルの部活動が多い。
- ◎設立 1924（大正13）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎2016年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、島根大、岡山大、広島大、島根県立大などに7人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、広島経済大、広島国際大、安田女子大などに延べ40人が合格。
- ◎URL <http://www.kaisei.matsue.shimane.jp/>

上で指導案を作成するようになりました。授業後の振り返りでも、以前は先生方が思い思いに感想を述べる程度でしたが、今は『つつも』を切り口として建設的な話し合いができています」と大多和校長は述べる。

進路観の醸成と思考力・表現力を養う「進路探究」

「開星夢実現計画」（図）の中心的な取り組みが、水曜日5時間目の「ドリカムの時間」（17年度から「進路

図 「開星夢実現計画」（特別進学コースの場合）

ステージⅠ 1年〈視野の確立〉	ステージⅡ 2年〈夢の探求〉	ステージⅢ 3年〈夢に向かって〉
三瓶研修 (自) 入学後の4月末に実施。新入生同士で交流を深め、集団生活により規律を学ぶ。クラスごとに校歌を歌う「合唱コンクール」が開催される。	小論文コンクール (自)(社) 受験勉強や自己表現、コミュニケーションの基礎となる小論文を全員で学ぶ。最後は、全員参加による、コンクールを実施。	ライフプランニング (自)(社)(進) 生命保険会社とのコラボレーション授業。一人ひとりの人生をプランニングし、自分の人生を考える。卒業後も役立つ実践的な授業。
アメリカ研修旅行 (自)(社) アメリカの姉妹校を訪れ、ホームステイをしながら異文化を体験する。 ※高校1・2年生合同での自由参加	模擬裁判 (社) 「裁判員制度」を、実際の事件を題材に学ぶ。最後は、模擬裁判を傍聴し、全員で判決を出す。	面接・小論文指導 (自)(進) 進学・就職に備え、一人ひとりの進路希望に合わせてきめ細かく指導。ここまでの開星高校での経験により、自己表現力が上がっていることを実感する。
語彙・読解力養成講座 (自)(社)(進) 社会への視野を広げ、社会を読み解くために語彙・読解力を養成する。検定を受験することも可能。	関東研修旅行 (自)(社)(進) 関東方面で2泊3日の研修を行う。自分で行きたいところを決め、進路について考える。	進路情報会 (自)(社)(進) 大学・短大・専門学校の教員を招き、自分の進路希望に合わせて、進学後や将来の話を聞く。 ※3年間実施

行事名の下にある表示の意味

(自): 自分を知る、自分を表現する (社): 社会に学ぶ、社会を学ぶ (進): 進路(夢)を考える

*学校資料を基に編集部で作成

探究」に名称変更予定)だ。職業ガイダンスや進路講話など、まとまった時間が必要な活動は、6時間目のLHRとつなげて2コマ連続で実施している。

1年次は職業調べを通して自分に適した進路を考え、2年次にその進路につながる学問分野や大学・学部・学科を絞り込む。特徴は、2年次に大学・学部・学科調べと並行して小論文講座やスピーチ、ディスカッション、語彙・読解力講座といった表現力育成の取り組みに重点を置いている点だ。学習進路部長の石川浩介先生は、次のように語る。

「教科の学びや進路選択において何より重要なのは、生徒が自分で考え行動する力ですが、本校の場合、自ら考えるところにたどり着けていない生徒が少なくありませんでした。進路意識の醸成だけではなく、進路実現に必要な思考力や表現力の育成が必要だと考えました」

16年度には、思考力や表現力を高める取り組みとして、石川先生が顧問となり、「探究クラブ」という部活動を創部した。3年生は2年次の流れを引き継いで小論文やディス

カッションを実施する。1・2年生は興味あるテーマを選んでミニ課題研究を行い、興味・関心を広げたり社会貢献について考えたりする。16年度現在、3年生19人、1・2年生11人が加入しているが、特に1・2年生が3年生から受ける刺激が大きいという。

「3年生が大学入試に向けて小論文に取り組んでいる姿を間近に見たり、先輩と一緒に入試の小論文問題に取り組んだりする中で大きな刺激を受けています。今後は運動部などに所属している生徒にも兼部させ、小論文講座に参加させるなど、より多くの生徒が参加できるようにしたいと考えています」(石川先生)

学びと社会のつながりに気づく「SMILEプログラム」

16年度に4年目を迎えたSSHの「SMILEプログラム」は、サイエンス(科学)・モラリティ(道徳性)・インターナショナルリテリ(国際性)・リテラシー(読み書き能力)・エンタープライズ(先進性)の頭文字から名づけられた。プログラムの策定にあたって教師たちが念頭に置いた

のは、現状の教育に対する反省である。SSH部長の田中薫先生は言う。

「授業で学習したことをテストで再現することはできても、本場に社会で役立つ力として身につけているのかという疑問を抱いていました。単に大学に合格するためだけの勉強ではなく、自分たちの力が社会に有用なものである、授業で学んでいることは意味があるということに気づかせ、生徒の変容を促したいと考えました」

取り組みの軸になるのが、学校設定科目の「科学探究」と「課題研究」だ。中学1年次〜高校1年次の「科学探究Ⅰ・Ⅱ」で、実験デザインやレポートの書き方、プレゼンテーションのスキル、クリティカルシンキングなどを身につける。その上で、高校2・3年次に理系選択者を対象に「課題研究」を実施し、自分が興味・関心のある、社会とのつながりを意識したテーマを追究する。

「理科以外の教科の知識も総動員して実験・研究を行うことで、自分たちが習得した知識が役に立つ、社会を変える力があるということに気づいてほしい。そうした自覚を持つ



写真 「起業家スクール for サイエンス」の様子。商品開発、販売などの過程で「自己実現」「社会貢献」といった仕事の価値を学ぶ。

ことが社会の一員として必要な素養であり、卒業後も自ら学び続ける基盤になるのではないだろうか」と、田中先生は期待を寄せる。

中高一貫コースの中学3年次・高校1年次を対象とした「起業家スクール for サイエンス」(写真)も、社会とのつながりを意識した取り組みの1つだ。生徒が企業に商品を提案して共同開発を行い、文化祭などで販売するプログラムで、生徒自身が受け入れ企業を探してアポイントメントを取り、実際にプレゼンテーションをして出資を依頼する。電話口で断られることも珍しくな

く、社会の厳しさを知る機会にもなっている。

教科融合型授業の導入で、 知識を統合・活用する力を養う

学びの意義を体感させるために、教科融合型の授業にも着手した。「SMILEプログラム」では、中学1年生〜高校1年生を対象に、国語と英語を融合させた学校設定科目「コミュニケーションメンソッド」を実践している。少人数グループで日本語でのディベートや英語でのプレゼンテーションを行い、論理的思考力やコミュニケーションスキルの向上を目指す。

16年度からはドリカムコース（17年度から「キャリアデザインコース」に名称変更）3年次の選抜クラスでも、教科融合型の授業を取り入れ、1学期は理科と地歴・公民、2学期は国語と英語で実施した。理科と地歴・公民の融合授業では、地元の食材を使った新製品の開発を行った。グループで食材や商品を考え、生産・流通まで見据えた計画を立てて発表

する。味覚や栄養など食品の成分については理科分野、商品開発や流通は地歴・公民分野の知識が反映される。16年度の3年生は、出雲市斐川町の出西生姜を使用したジンジャーエールの開発を提案した。17年度からは3年次のキャリアデザインコース全クラスで教科融合型の授業を取り入れる予定だ。

面談での問いかけが 進路への考察を深める

「ドリカムの時間」や「SMILEプログラム」で進路意識・社会貢献意識を醸成してきた生徒たちが、最後に自分と社会や大学との接点について深く考える機会になるのが、学習進路部主導で実施する「判定面接」だ。一般に大学への推薦の可否は、推薦基準に照らし、教師が会議で決めることが多いが、同校では「判定面接」と呼ばれる生徒との面談で推薦の可否を決定する。

推薦希望者1人に対して教師2人の面接を行い、志望理由や進学後の展望などをつぶさに聞く。どのよう

な地域貢献がしたいのか、なぜその学問を学びたいのかを繰り返し問いつける中で、生徒自身も漠然としていた考えが明確になり、自信を持って推薦入試に臨むことができる。

「面接を受ける生徒には、私たちを感動させるような話をしなさいと言っています。人の心を動かすくらいのが言えなければ、本人も覚悟ができませんし、進学後もモチベーションが続かないのではないのでしょうか」と、浜屋教頭は語る。

ロシアにバレー留学していた生徒は、帰国後、将来の目標が持てなかったが、面談を繰り返す中で「島根県とロシアの懸け橋になりたい」という思いを抱くようになった。一念発起して受験勉強に取り組み、ロシアと交流のある島根県立大学に合格し、入学式で新入生代表の言葉を任せられたという。

ここ数年、主体的に進路実現に向かう生徒が増えたのも一連の取り組みの成果である。探究クラブでは、生徒同士が自主的に面接練習に取り組んだり、志望理由書を見せ合い批

評したりする姿が見られる。また、海外の大学に進学したいという生徒も毎年現れるようになった。

生徒同士が学び合う場面も増えた。同校では全校で「Classi」(*)を導入し、生徒の自学自習をサポートしている。ある生徒がコミュニケーション機能を使って質問すると、教師が回答する前に別の生徒が必ず答えを書き込む。なぜその解き方になるのか、といった議論が生徒同士で生まれることも多く、教える側も教わる側も理解が深まるといえる。

今後の課題は授業力の向上であると、大多和校長は語る。

「答えのない社会で学び続ける人材を育てるには、教師を乗り越えていくくらい、豊かな発想を持った生徒を育てなければいけません。そのためにも、何よりも教師自身の指導力、ファシリテート力を高める必要があります。先生方に研さんを積んでいただくとともに、生徒と教師がともに成長していける学校の風土・文化の醸成を目指していきたいと考えています」（大多和校長）

*株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。